

国際交流に果たす日本庭園の意義

福原成雄

はじめに

平成 11 年度学校法人「塚本学院海外研修計画」に基づき、「国際交流に果たす日本庭園の意義」とする海外調査を平成 11 年 7 月 1 日から平成 11 年 8 月 31 日にかけて行った。調査先は、英国タトンパーク (Tatton Park)、そしてロイヤルボタニクガーデンキュー (ROYAL BOTANIC GARDENS KEW) である。両園は英国を代表する公園、植物園として英国市民はもとより世界の国々の人に愛され親しまれ、特に KEW は世界中から多くの園芸及び庭園専門家がそれぞれの研究テーマを持って来園する研究のメッカである。両園には、明治 43 年 (1910) 以後に作られた日本建築、庭園が残されている。明治 6 年 (1873) ウイーン博覧会で、初めて日本式庭園が作られて以来、多くの日本庭園が友好都市、海外の博覧会等で築造されている。そして近年、益々日本庭園の築造熱は高まり、作られる庭園も完成度の高い庭園が観られる様になっている。しかし、今後の維持管理と、外国の庭園文化にどのような影響をもたらすのかという問題、さらに、今まで作られた日本建築、庭園施設が管理不足によって荒廃しつつある問題に対して、どのような方法で国際援助できるのか、調査研究が急務であることから、英国における日本庭園の調査を行った。さらに海外でどのようにして日本庭園が作られてきたかを知り、海外で作庭された日本庭園が日本文化の国際交流上並びに造園史の上からどのような役割を担っているのかを明らかにするとともに、後世に残す記録としても必要であると考え

た。英国における日本庭園の現状は、日本では佐藤昌氏^①、鈴木誠氏^②が取り上げているが概要のみで詳しい実態調査が為されていない状況である。英国でも良く把握されておらず、かろうじてナショナルトラストが調査して掲載しているだけである^③。

本論文は筆者が 1999 年 10 月に「国際交流に果たす日本庭園の意義」で学校法人塚本学院に提出した成果論文に加筆したものである。

1. タトンパークの概要

チェシャー、マンチェスター近郊に所在するタトンパークは、タトン領主エジトン (Egerton) 家の領地 (公園全体面積約 400 畝、庭園面積約 20 畝) として約 400 年にわたって整備拡張されてきた。(図-1 参照)

タトンの領地は、イギリスの大法官時代に (Lord Chancellor of England) になって、エジトン家の若い息子のトーマス エジトン卿 (Sir Thomas Egerton) によって 1598 年に所有された。エジトン家が 18 世紀後半から繁栄し、現在見ることのできる新しい館 (Mansion) を造り出した時から変化し始めた。それは 1780 年から 1813 年の間に、建築家、サミュエル・ワイアット (Samuel Wyatt) (1737-1807) と彼の甥ルイス・ワイアット (Lewis William Wyatt) (1777-1853)、により当時流行していた新古典主義のスタイルで別々の段階で広範囲に建設された。建物内の豊富な服飾品、絵画等の高価なコレクションと本はすべてエジトンによって 18 世紀の終わり

から 19 世紀の初めにかけて集められたものである。大邸宅を囲む壮大な公園は、ハンフリー・レプトン (Humphry Repton)、ウィリアム・アームス (William Eames) とジョン・ウェブ (John Webb) を含めて数人の風景式庭園の造園家によって造られた。1791 年にハンフリー・レプトン (1752-1818) は、タトンパークの風景式庭園への相当な改良の可能性を示すことに関して「赤本」を作り、そしてその多くは後に実現された。公園面積は 1795 年にはすでに 25000 エーカーに及んでいたが、今日では 2000 エーカーである。公園内の広大な湖、森林地帯、草原、そこに生きる鹿、兎、栗鼠等の野生生物は、多種多様さと一緒に、大邸宅に壮大な風景画的環境を提供している。タトンパーク内の館を中心とする庭園は常に、発展途上にあり、18 世紀から新古典主義の大邸宅の初めまで 50 エーカー以上を拡張して、タトンパークの中で主要な場所を形成した。庭園は彫像と芸術学校のような立派な庭園の建物によって拡張され、日本式庭園を含む観賞用庭園を造り、それは 18 世紀初期からの庭園デザインを反映している。タトンパークのエジトン所有の歴史の終幕は 1958 年である。この年バロン・エジトン男爵 (Baron Egerton) が未婚で亡くなり、1960 年に契約書が交わされ、維持管理をナショナルトラストに任せ、ナショナルトラストと郡議会の相談によって運営、

融資されたようにナショナルトラストとチェシャー郡評議会 (Cheshire County Council) の間に委託された。

タトンパークのゲートからは左右にハンフリーレプトン設計のブナの並木が遙かにつづきその間から鹿や、羊、リス、ウサギ等を眺め楽しみながら館のメイン入口に到着する。近くの町クヌツホード (Knutsford) は古い煉瓦づくりのたたずまいを残す美しい町である。

1-1 タトンパークの組織

現在はナショナルトラストとチェシャ州によって広大な公園と庭園が美しく維持管理がされており、四季を通して多くの来園者が訪れている。スタッフと管理部門は以下の内容である。

- | | |
|------------------|-------------|
| 1. スタッフ総計 | 214 人 |
| | 常駐スタッフ 84 人 |
| | 夏スタッフ 130 人 |
| 2. 部門 | |
| 1) 大邸宅 (Mansion) | |
| 2) 庭園 庭師 | 14 人 |
| 事務、売店 | 7 人 |
| ボランティア | 38 人 |
| 3) 商店 | |



図-1 Tatton Park 庭園全体図

- 4) 古い館 (Old hall)
- 5) 公園
- 6) 売店
- 7) イベント
- 8) 森林地区
- 9) 森林巡視員 (公園、便所、鹿、ごみ、訪問者、フェンス、駐車場、交通)

2. タトンパーク内日本式庭園

タトンパーク内日本式庭園 (面積約 2,000m²) は、第三代エジトン男爵 (Alan de Tatton Egerton) (1845-1920) が明治 43 年 (1910) ロンドンで開催された日英博覧会の日本庭園を見学して、1910 年頃に日本の職人 8 人を招き作庭がされたとされていた。庭園内には、茶室、神社、鳥居、日本から運ばれた灯籠が適所に配置され、モミジ、ツツジ、ヒノキ等の日本の植物が植えられ地を苔で覆い、英国における西芳寺の雰囲気形成し、訪れる多くの人々を魅了しつつ日本文化紹介の役割を担ってきた。しかし、近年樹木が生い茂り、当初設置されていた入口門、傘亭、井戸、石柵等が老朽化のため撤去され、さらに、園内の、階段、橋、飛石などが消失ないし損壊しており、安全面、維持管理面から来園者の立ち入りを禁止している状況である。

タトンパーク、ヘッドガーデナーのサム・ヨード氏の話によると、作庭当初は中国風の庭園施設が置かれていたが現在は日本的でないため撤去 (館に保管) しているとのこと、このことからタトンパーク内日本式庭園は、中国的なものとなら日本物なものがミックスされた東洋趣味 (シノワズリー) によって造られたと考えられた。

この庭園は、シノワズリーの庭園として非常に興味深く、価値があり、日本的ではないとのことで中国的な庭園施設を撤去するのは歴史を消し去ることに成るのではないかと、作庭当初の状況を工事写真と現存する庭園施設等からよく見比べ、その価値を明らかにすることが今回の大きな目的の一つになると確信した。

(写真-1・写真-2・写真-3・写真-4・写真-5・写真-6 参照)



写真-1 庭園外周からの景



写真-2 庭園外周からの景



写真-3 庭園内の景



写真-4 庭園内の景



写真－5 お茶室の景



写真－6 お社の景

3. 各種調査

タトンパーク内日本式庭園を知る唯一の資料は、1910年頃に写されたとする工事中の写真と完成写真である。この貴重な写真は、1989年頃にタトンパークのヘッドガーデナー、サム・ヨード氏のもとに突然60歳代の農夫が訪れ、置いていった木箱の中に庭園の工事中写真と完成写真のガラス原盤24枚が入っていたのである。この工事中の写真と言い伝えにより1910年頃の作庭で8人の日本人により作庭されたと言われてきた。

その他の工事図面、工事記録が残されておらず謎とされ、8人の日本人についても、写真があったのだが現在は紛失し名前もわからないのである。今回の調査では、石造物、滝、護岸等の実測調査、高木、低木の実測調査を行うと共に、記録等の新たな資料調査も行い、これらの疑問点を下記の調査方法により少しでも明らかにする

ものである。

調査方法

- 1) 海外における日本庭園が作庭された由来、そしてどの様に理解され、利用されているか調査する。(文献調査、アンケート調査)
- 2) 日英博覧会以後に英国で作庭された日本庭園の初期設計、技術指導者、庭園工法について調査研究をする。(既存資料の収集調査)
- 3) 海外における文化的価値を有する日本の建築、庭園が、建設当初と比べどの様に変化しているか調査する。(石造物の実測、高木、低木の実測調査)

明らかにすべきこと

- 1) 箱を持ってきた人物(名前、性別、年齢、その時の状況、何を話したか等)
- 2) 1910年当時の所有者について(名前、経歴、趣味等について)
- 3) 8人の日本人の根拠(書かれた物、写真、口伝え等)
- 4) 作庭当初の庭園施設(どの様な物か、現在何処にあるのか等)
- 5) 庭園の本について(日本、中国)

3-1 文献調査(庭園に関する書籍)

タトンパーク・マンション内図書館の膨大な資料の中から日本に関する資料を収蔵品管理主任(Collections Officer)のマギー女史(Maggie Mckean)に探していただき、焼き物、浮世絵、日本庭園に関する貴重な書籍等の提供を受け、書籍については彼女の部屋で心ゆくまで閲覧させていただいた。

日本に関する書物ジョサイア・コンドル(Josiah Conder)の“Landscape Gardening in Japan”(1893)並びにフローレンス・ドゥケーン(Florence Du Cane)の“The Flowers and Gardes of Japan”(1908)さらにミセス・バジル・ティラー(Mrs. Basil Taylour)の“Japanese Gardens”(1912)の三冊を見ることができた。

ジョサイア・コンドル (1852~1920) は、1877 年 (明治 10 年) 来日し、東京工部大学造家学科で約 10 年間教鞭をとったイギリス人建築家で、わが国における近代建築学の礎を築いた。退官後、東京にて建築設計事務所を開設し日本において 1920 年 (大正 9 年) 没している。この間 1866 年 (明治 19 年) 5 月「日本アジア協会報」に日本庭園に関する論文を發表し、それをもとに 1893 年 (明治 26 年)「日本の作庭術」“Landscape Gardening in Japan” (全 2 巻) を著した⁹⁾。内容は秋里籬島が文政十二年 (1829) に著した築山庭造伝¹⁰⁾を記している。針ヶ谷鐘吉¹¹⁾は「コンドル博士の日本庭園観」で、「日本庭園を深く研究し、更に之を博く世界に知らしめた人…来訪外国人の為のガイド・ブック…」と紹介している。

フローレンス・ドゥカーンの「日本の花と庭」“The Flowers and Gardens of Japan” (1908 年) は日本庭園の記述についてはコンドルの著作を参考にし、50 枚の水彩画をカラー図版で挿絵としている。ミセス・バジル・テイラーの「日本庭園」“Japanese Gardens” (1912 年)

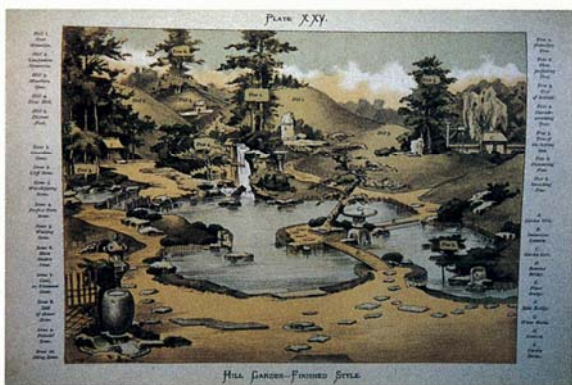
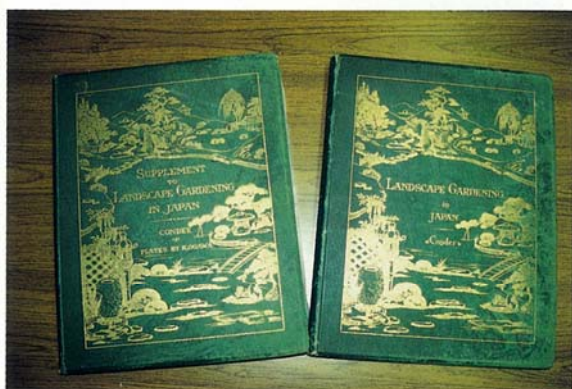


写真-7・写真-8
Josiah Conder の “Landscape Gardening in Japan” (1893)

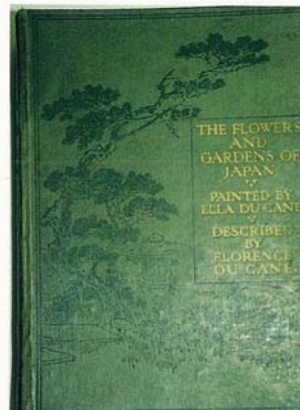


写真-9・写真-10
Florence Du Cane の “The Flowers and Gardens of Japan” (1908)

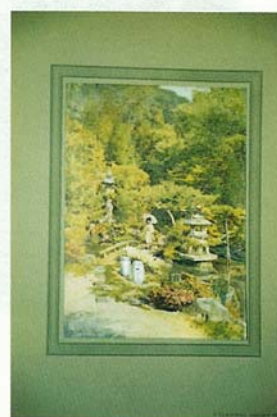
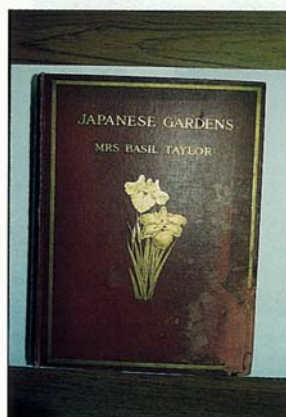


写真-11・写真-12
Mrs. Basil Taylour の “Japanese Gardens” (1912)

は 28 枚の水彩画をカラー図版で挿絵としている。(写真-7・写真-8・写真-9・写真-10・写真-11・写真-12 参照)

3-2 既存資料の収集調査

3-2-1 工事写真及び完成写真

1913 年頃の工事写真 (写真-13・写真-14・写真-15・写真-16) 及び完成写真 (写真-17・写真-18・写真-19・写真-20) を克明に調べ、現況と比較することによって、建設当初からどの様に庭園が変化してきたかを知ると共に、誰が工事をしたのか、工法は、喪失したものは何かを明らかにした。入口門が当初一カ所とされていたのが二カ所であること、さらに傘亭の位置が庭園の眺望場所として重要な場所であることが判明した。

写真-13 の人物は 1910 年当時のヘッドガーデナー Cubberley である。この写真から流れに板石を立並べて

行っている護岸工事の状況と、既にロール芝による工事が行われているのが分かる。写真-14 の人物は、第三代エジトン男爵である。写真-19 の左上にわずかに入口門の屋根がのぞいているのが分かり、入口門が 2 カ所であったことがこの写真から見つけることが出来た。写真-17 により外周の囲いに垣が使用され、藤棚が造られている。写真-19、写真-20 からは傘亭の位置、スツールの配置を確認することが出来た。



写真-13 施工中写真



写真-14 施工中写真



写真-15 施工中写真



写真-16 施工中写真



写真-17 完成写真



写真-18 完成写真



写真-19 完成写真

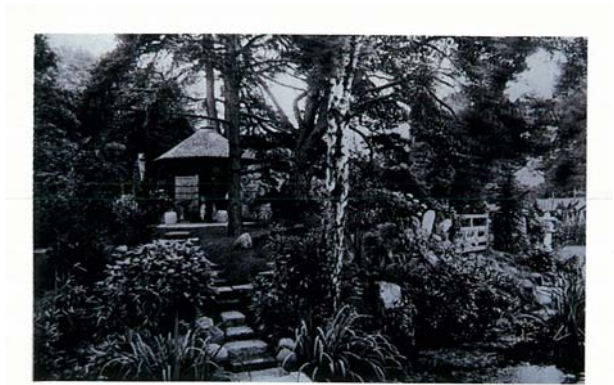


写真-20 完成写真

3-2-2 庭園施設図面

ヘッドガーデナーのヨード氏もその存在を知らなかった設計当時のタトンパーク建築図面と庭園施設図面 (Tatton Park Japanese Garden) をマギー女史の努力によって、チェシャー州 (Cheshire) のチェスター (Chester) 資料室 (Cheshire Record Office) に保管されていることを新たに発掘した。

チェスター資料室で、何年間も人目に触れられることの無かった多くのタトン関係の建築図面に混じって 1912 年 7 月 7 日・12 日記載の Japanese Garden の二つの門 (Entry of Japanese Garden)、傘亭 (Umbrella)、茶室 (Japans House)、神社 (Shintu Temple)、橋 (Bridge)、柵 (Baulsfvade) 等の施設図面を見ることが出来た。新たな発見である。感動的な一瞬、しかし書かれた図面は残念ながら日本人が設計した図面ではなく、タトンパーク地所 (Tatton Parke Estate Works) のサインがあり、明らかに英国人によって設計されたものであった。

この図面から、現在 1910 年に作庭されたとする案内が、修正され、さらに、日本人の関与がかなり違った形であることが明白となった。

三代目アランデタトンが日本庭園に憧れ、図面を英国人に書かせたこと、その図面を基に日本の大工に依頼したのではないか、このことは屋根裏の日本人によって書かれた割付文字による。木材の加工が日本で行われたのか、英国で行われたのか、そして実際に日本人がやって

来て施工したのかは明らかでは無いが、日英博覧会に英国を訪れた日本人大工がタトンに関係している気がしてならない、キューガーデンに勅使間を移築した大工が英国に残り、仕事をしたと考えられないだろうか。(写真-21・写真-22・写真-23・写真-24)

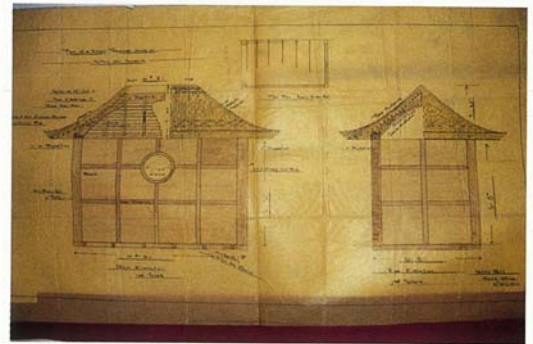


写真-21 茶室 (Japans Hous) 設計図

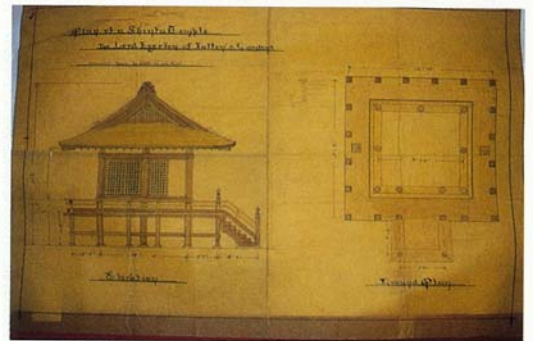


写真-22 神社 (Shintu Temple) 設計図

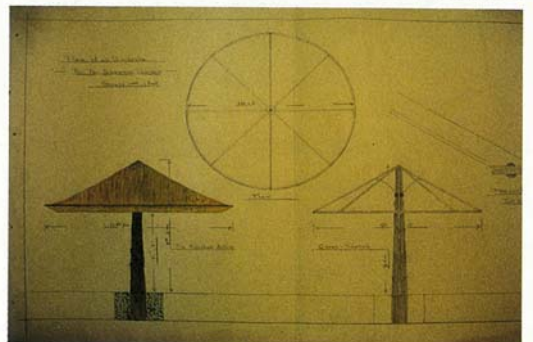


写真-23 傘亭 (Umbrella) 設計図

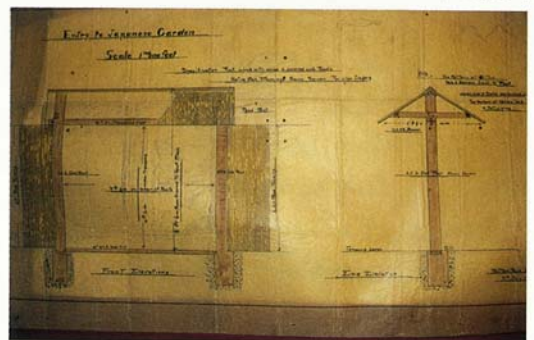


写真-24 門 (Entry of Japanese Garden) 設計図

庭園施設図面から下記のことが明らかになった。

- 1) 設計された年が 1912 年 7 月であった。
- 2) 図面表記、工法が明らかに英国人の設計者で、英国の工法であった。
- 3) 施設名称、設計内容が明らかに成った。
- 4) **Japans House** の図面寸法と建設された寸法が同寸であった。**Shintu Temple** は図面より 1m 程大きくなっていて、さらに屋根裏の木材には「峠より尺三寸下がり」墨による割付の文字が書かれ、細部の納まり、木組み等から日本人の大工によって建築されたと判断することができた。(写真-25 参照)



写真-25 神社屋根裏に残されていた割付文字

3-3 実測調査

石造物（灯籠、石塔、亀等）の実測をして分かった事は御影で造られた物と、コンクリートで造られたものがあること、御影は日本で造られ、コンクリートはイギリスで造られたと考えられる。さらに、灯籠が組立を間違えて建てられているのではないかと考えられる。灯籠の中には京都の白川の石が使用されている。

3-3-1 滝、流、池護岸石組

最初にこの庭園を訪れて感じたことは日本庭園の骨格である石組みが無いのはなぜかである。滝石組、流れ石組等を調べたが、石組みが日本的ではなく、ただ石を積み重ねているだけであった。水の落ち口の形も日本的ではなく、石の上に石を積み上げる中国の手法が見られた。このことは何を意味しているのだろうか、

人工的な築山の作り方も何かわざとらしく、庭園内飛石の配石も所々、延石を組合せ日本的にはしているが配石が大まかで雑である。板石を並べた護岸の手法、橋ばさみもなく、ただ流れに渡しただけの橋の掛け方にも違いがあり、日本的な工法の痕跡を探すがどこにも見られない。

滝、壁泉、護岸、水鉢等の実測調査を行い、ますます日本の職人が来て工事を行ったとは考えられなくなった。加工石材を布積する石の組み方、滝の作り方が違いすぎるのである。さらに吐き出し口を組み入れた壁泉も日本では見られない工法であった。

現在の状況は日本的樹木、苔、シダ等の地被類が茂り、人工的な構造物が覆い隠され、そのことが自然の雰囲気醸し出し、そこに灯籠があり、東洋的な建築が建てられて日本的風情を演出しているのである。

聞き取り、実測調査結果により下記の内容を明らかにした。

- 1) 箱を持ってきた人物？

Mr. Sam Youd のところに 10 年前 (1989) に 60 歳ぐらいの農夫が訪れ、何も話さず箱だけ置いて出ていった。その箱の中に写真の原盤が入っていた。

- 2) 8 人の日本人の根拠について、写真は誰が見たのか？

1960 年からナショナルトラストの管理になった時にチェシャ州の公団の女性担当者が他の場所で整理している時に見たのだが、いつの間にか無くなっていた。

1960 年に前の持ち主が資料を 3 日間燃やしている。

34 年前のヘッドガーデナーの **Som Jockson** が 1960 年に **ガーデンクルニクス** (現在は園芸ウイークリー **Haymarket** 発行) に日本庭園の記事を書いている。その中にもしかしたら日本人の名前が書かれているかもしれない。

- 3) 実測から分かったこと

京都の白川で造られた灯籠が明らかに二つある。

二つとも風化が激しく、修復、新しく据え直す必要がある。

他の灯籠も日本で加工された物である。

4) 護岸の工事について

護岸の工法が板石を建て並べて造られており、自然石が無かったのか、英国式の護岸工事であったのか？

1910年当時のヘッドガーデナーCubberleyによって（板石がたくさんあり）考えられたかもしれない。

5) 庭園内石塔後ろの自然石はなぜあそこに置かれているのか？

1960年当時のナショナルトラストにはお金が無く維持管理ができなかった。

初めマンチェスター大学に話をしたが断られ、次にチェシャー州にお願いした。1962年に老朽化していた門、柵を取り外した。その時に石も取り除いたと考えられる。灯籠は、風化を止めるため硬化剤で固めている。

アンケートを行っていて、来園者の日本庭園に対する憧れの思いが伝わってくる。この庭園を訪れる来園者は日本に感心がある高齢の人が多くようである。英国人来園者は現在の状況、モミジと苔で草花のない自然環境に非常に満足しており、反対に日本人来園者には手入れができていないと感じられている。さらに英国人には日本の樹木剪定の意味が理解できないようである。

4. タトンパーク内日本式庭園の考察

タトンパークの日本式庭園については初め、中国風と日本風が混合された庭園として造られたと見ていたが、現場状況調査、資料から日本庭園を造ろうとして現在見る形に成ったことが明らかにされた。それは、日本庭園に関する書籍を基に、日英博覧会の印象で設計されたと考えられる。さらに、日本人がタトンパークを訪れたかどうかは定かでないが、神社の建築は明らかに日本人が関係していた。

佐藤昌氏は「外国における日本庭園」の中で「庭に関する著書によって日本趣味が庭園に用いられる動機となった原因と見ることは考えられない。日本庭園が英国で造られたものは、日本に滞在して、日本庭園の長所をよく知り得た外国人が、日本庭園を思い出として、これを再現したいとして造ったものがその主流であったと見るべきであろう。」と述べられている。タトンパークの日本庭園は、現況施設の実測と各種資料により、各種の本を参考にして英国人の造園家によって1912年から工事が始められ、1913年に完成されたものと判断する。

写真-26は、Florence Du Caneの“The Flowers and Gardes of Japan”（1908）の水彩画による挿絵で、写真-27の施工写真と見比べると入口門、階段、灯籠の配置がそっくりである。さらに植栽まで似せて施工がされ



写真-26 “The Flowers and Gardes of Japan” (1908)



写真-27 施工中の写真 (1913年頃)

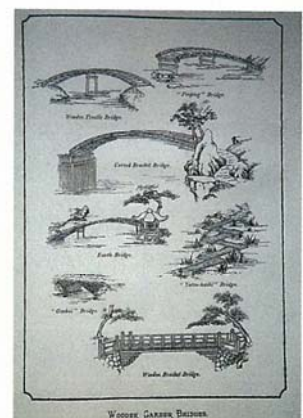


写真-28 “Landscape Gardening in Japan” (1893) に掲載された石組園生八重垣伝の図

ている。写真-28 は、Josiah Conder の“Landscape Gardening in Japan” (1893) で紹介された秋里籬島の文政十年 (1827) によって書かれた「石組園生八重垣伝」⁶⁾ の八ッ橋之図である。写真-29 の完成後の写真と見比べると八ッ橋の形態と雪見灯籠の配置が反転した形で似通っていることが理解できる。

したがって、筆者は明らかに庭に関する書物によって庭園が造られ、さらに日本の庭園文化が日本を訪れたことのない英国人に理解され、英国人の手によって造られた好事例として紹介するものである。また、この庭園に日本人が関わったとすれば神社 (Shintu Temple) の建築工事で日本人の大工が関わったものと考えられる。



写真-29 完成後の写真

5. 今後の課題

タトンパーク内日本式庭園は、1910 年頃に、当時の領主アランダトンが日本庭園にあこがれ、建築、石造物を日本から運んで、明らかではないが、日本から大工を呼んでタトンの指示により、大工とタトンの庭師、イギリスの職人を使って造られた。そして日本の庭園文化が海外に紹介され受け入れられ日本式庭園が英国に造られた歴史的価値を有している。さらに、優れた庭園として他の日本式庭園の見本となっている。

海外で日本式庭園が造られた庭園の価値については上述した通りであるが、今後の課題は、日本式庭園の意味、庭園施設の各々の意味と価値等について来園者にどのように説明したらいいのか、なぜ庭園の維持管理、保存修

復をするのか、どの様に保存修復すればいいのかの問いに対して答える必要がある。タトンパーク内日本式庭園石造物の保存の仕方は痛みが激しい灯籠、亀、壺についてはコート剤を塗布している。

英国各地に日本式庭園が現存し、日本庭園を通じた日本文化への関心は非常に高く、タトンパーク内日本式庭園のように多くの来園者に親しまれ観賞されている庭園を保存修復することで、文化交流の大切さと、日本庭園の維持管理技術、伝統文化を紹介することができる。

海外の日本式庭園の維持管理を行う場合の問題点として

- 1) 公園と庭園に関し維持管理に対する考え方の違い。
- 2) 日本のような樹木剪定がされず、自然樹形で管理されている。
- 3) 古くからのものを保全し、再利用する事を考えている。

海外の日本式庭園の樹木の維持管理を含む保存修復を行う場合、庭園の実態調査を十分に行い、対象の庭園が建設された国、及び地域の維持管理の状況、労働条件、庭園資材等の事前調査を行い、受入体制を十分に検討する必要がある。

6. 英国における日本庭園の実態調査

今回の調査で下記の 10 箇所 (池泉回遊式-8 箇所、枯山水-1 箇所、その他-1 箇所) の現地調査、実態調査 (一カ所の測量) を行った。

- 01 Royal Botanic Gardens, Kew (枯山水・1996 年)
- 02 RHS Garden Wisley (盆栽園・1998 年)
- 03 Holland Park (池泉回遊式・1991 年)
- 04 Heale House Garden (池泉回遊式・1901 年)
- 05 The Peto Garden at Iford (池泉回遊式・1982 年)
- 06 Gunnersbury Park (池泉回遊式・1902 年頃)
- 07 Alderley Edge (池泉回遊式・1920 年頃)
- 08 The Water Gardens Warren Road, Kingston Hill, Kingston, Surrey (池泉回遊式・1865)
- 09 Peckham Rye Park (池泉回遊式・1914 年頃)
- 10 Tatton Park Japanese Garden (池泉回遊式・

1913年)



写真一30 Heale House Garden (池泉回遊式・1901年)



写真一31 The Peto Garden at Iford (池泉回遊式・1982年)



写真一32 The Water Gardens Warren Road, Kingston Hill, Kingston, Surrey (池泉回遊式・1865)



写真一33 Peckham Rye Park (池泉回遊式・1914年頃)

7. おわりに

海外の日本式庭園調査を実施して、英国各地に現存する日本式庭園を含めて日本文化に関する関心は非常に高く、国際交流、文化交流の大切さを、日本国内で考えているよりも強く感じその必要性を再認識した。

今回の調査が基になり文化的価値を有するタトンパークの日本式庭園の修復事業が日本万国博覧会記念協会に認められ、2000年度の補助事業対象となり修復工事が行われることになった。さらに、(財)国際花と緑の博覧会記念協会から海外の日本庭園調査を依頼され2000年3月末にドイツ国内に現存する10カ所の日本庭園調査を行った。

1996年のキューガーデン日本庭園の作庭に始まり、海外の日本庭園調査、そして修復工事をさせていただいたのも時代の要請なのかも知れない。今後とも精進するとともに、継続して海外の日本庭園調査、保全修復が行えることを念じている。

この度の平成11年度学校法人「塚本学院海外研修計画」に基づく、「国際交流に果たす日本庭園の意義」とする海外調査を行うに当たりお世話になりました学院関係者の方々、快く送り出してください、また英国滞在中も励ましのお言葉を賜った環境計画学科学科長 清水正之先生、環境計画学科教員の方々、タトンパークを紹介していただいた客員教授の坂本新太郎先生には心からお礼申しあげます。

また、タトンパークで公私にわたりお世話していただいたヘッドガーデナーのサム・ヨード氏、資料の提供、収集から図面探しに努力していただいたマギー女史、実測調査からアンケート調査の協力をしていただいた Wisley Specialist Option Certificate in Ornamental Horticulture で研修中の大阪芸術大学環境計画学科卒業生の志水彩子さんには記して感謝の意を表したい。

参考文献

- (1) 佐藤昌 外国における日本庭園 造園雑誌 49 (3) 1986
- (2) 鈴木誠 欧米人の日本庭園観 造園学論集 別冊 No.2 1997
- (3) Richard Bisgrove “THE ENGLISH GARDEN” THE NATIONAL TRUST BOOK
- (4) Josiah Conder の “Landscape Gardening in Japan” (1893)
- (5) Florence Du Cane の “The Flowers and Gardens of Japan” (1908)
- (6) Mrs. Basil Taylour の “Japanese Gardens” (1912)
- (7) 上原敬二 築山庭造伝後編解説 加島書店 1973
- (8) 上原敬二 石組園生八重垣伝解説 加島書店 1973
- (9) 針ヶ谷鐘吉「コンドル博士の日本庭園観」日本庭園協会「庭園と風景」1936
- (10) Edited by Graham Rose+Peter King THE GOOD GARDENS GUIDE 1999